

政治学者
法政大学教授

下斗米 伸夫 さん



今回は、ロシア・ソ連政治史の泰斗である下斗米伸夫法政大学教授にインタビューを試みた。ロシアの現在、過去、未来。日本との関わり。興味は尽きない。

(聞き手：臼井 一廣)

プロフィール しもとまい・のぶお

1948年北海道札幌市出身。法政大学法学部教授。法学博士。専攻は比較政治論、ロシア・CIS政治・ソ連政治史。文部省（現 文部科学省）派遣、新渡戸フェロー、ハーバード大学フェロー、フルブライト・フェローとして旧ソ連、英国、米国留学。朝日新聞客員論説委員、日本国際政治学会理事長などを歴任。著書・論文多数。

—政治学者を志されたのは、なぜですか。

ひとつは、私が学園闘争世代だということです。政治に対する憧れと反発の両方があり、当時、東大ではたまたま1年間、自主的に勉強する期間がありましたので（笑）、私は「真面目に勉強をしなくてはならない」と考えたのです。

—政治学の対象は広いのですが、あえてソ連（ロシア）を専攻されたのは、なぜですか。

当時、中ソ対立、チェコの民主化等の問題があり、評論はあっても、誰も現実を説明できなかった。理想論、運動論、イデオロギーではなく、体制論です。そんな状況の中、たまたまソ連の1920年代、30年代を教えている溪内謙先生が本郷にいらっしゃるということで、私はロシア史を選びました。もっとも、ソ連はいわゆるブレジネフ時代で、なにも面白いことはないわけです。

—マルクス＝レーニン主義の嵐が吹き荒れている時代に、一歩引いて冷静な目で世の中の喧騒を見ていたということですか。

違います。マルクス＝レーニン主義がバラバラにな

る時代だったのです。毛沢東主義であるとか、チェコの民主化とか、「それは何なの？」という感じでした。教科書に書かれていることでは、現実を説明できないわけです。そこに関心を持ちました。

—なるほど。では、ご自身にとってのソ連崩壊は何だったのですか。特にベルリンの壁崩壊をリアルタイムで経験できたことをいかがお考えですか。

ソ連崩壊を最初に言い出しながら、最後まで気が付かなかったとでもいいでしょうか。当時私が書いた本には、「ソ連崩壊など、そう簡単に起きるものではない」という一文がありますから、忸怩たる思いです（笑）。「国家はこんなに簡単に崩壊するのか」という感想を持つとともに、国家の崩壊が平和裡に起きたことに驚きました。ソ連型の社会では、小泉政権が安倍政権に交代するのはわけが違いますから、あらためて「政治とは何か？」ということに関心を抱きました。

—共産圏は多くの政治家（statesman, politician）を生んでいます。レーニン、スターリン、毛沢東、ゴルバチョフ、エリツィン、プーチン、金日成……最も魅力を感じる政治家は誰ですか。

いずれも「ものの考え方」は単純なのでしょうが、「やっていること」はバラバラですから、研究の宝庫です。ただ、ロシア人は評価しませんが、私個人としては、ゴルバチョフに個人的な親近感を持ち、また、彼は偉大だと思います。

—日本でも、ゴルビーブームというものがりましたが、ゴルバチョフの歴史的な評価はどうか。

情報を集めて情報を公開していく過程と権力を失っていく過程が一致したということです。

—最新の著作である『モスクワと金日成—冷戦中の北朝鮮 1945—1961年』（岩波書店）について、お尋ねします。これは、ロシアの公文書を通じた北朝鮮研究ということでよろしいですか。

はい。ロシア大使のほぼ8年分の日誌があり、日々、平壤で起こっていること、本国に報告したことが綴られています。

—その文書を研究対象とされたきっかけは何ですか。

1990年代はじめに、ロシアの重要な文書がマイクロフィルム化され、そのコピーが許されたものを北海道大学の図書館が死蔵していたのです。

—金日成についてはどんな記載がなされているのですか。

第二次世界大戦後、祭り上げられて、politicsを覚えて自主独立していくというプロセスです。

—話は戻りますが、ロシアの強みは何ですか。

その広さも含め、ヨーロッパとアジアにまたがっているということです。反面、ヨーロッパになりたかったけれどもなれなかった、また、アジアでもないということですが。

—ロシアの課題は何ですか。

シベリアの地下資源をどうするかは、全地球的な問題です。この問題は、ロシアが中国、北朝鮮、韓国、日本とどう付き合っていくかとも絡みます。

—今後のロシアが世界に占める役割は何ですか。

欧米型グローバルスタンダードに入りきらないことがもたらす積極的な面を生かすことです。やはりユー



私は学園闘争世代。政治に対する
憧れと反発が、政治学者を志す
ひとつのきっかけになりました。

ラシアというのはどこか異質なものであるわけですから、イスラム・アラブ、中国、インドという異質なものをごまかして、国際社会の中でいかなる地位を占めるかです。

—では、日本はそういうロシアとどう付き合っていけばよいのですか。

ある意味で、ロシアと日本は非常に対照的な社会なのです。陸の大国と海の小国という物理的な違いがあります。他方で、1990年代は両国とも「失われた10年」という失敗は共通しています。経済、少子化問題、中国との付き合い方といった共通の問題を抱えています。

—ロシアと日本は、シベリア抑留等の歴史問題、北方領土問題など、懸案を抱えています。両国の親善のために何か工夫はできるのですか。

サンフランシスコ条約で積み残した問題が大きいといわざるをえません。問題は、解決する意欲を持つかどうかです。それと対話が必要です。

—プーチン後のロシアはどうなりますか。

国家と巨大企業体をコントロールしている層が今後もロシアをコントロールしていくでしょう。この層がグローバル経済の中でどう変容していくかを見守っていききたい。

—最後に、ロシアから見た日本とは、どのようなものですか。

ロシアから見ると、日本はずっと憧れの対象です。日本は、クリーン（含む、腐敗がない）で、経済がきちんと機能し、市場主義社会の中での勝利者です。